角笛吹く子

小川未明

青空文庫

町の四つ角に立って、一人の男の子がうろうろしていました。子供ははだしで、足の指を赤くしていましたけれど、それを苦にも感じないようでありました。短い黒い着物をきて、延びた頭髪は、はりねずみのように光っていました。

子供は、このあたりのものではないことはよくわかっています。前には、こんな子供がこの付近で遊んでいたのを、だれも、見たものがないのでありましょう。きっとどこかからやってきて、帰る途を迷ったにちがいありません。けれど、なかなかきかぬ気の子供は、それがために、けっして泣き出すようなことがなかったのです。

町には、もう雪がたいてい消えかかっていましたけれど、なおところどころに残っているのが見えました。子供は、車がいったり、きたりしますのを目を円くして、おびえながらながめていましたが、あまり自分に注意をする人もありませんので、やっと安心したように、いくらかおちついたらしいようすでありました。ちょうど山がらすが里に出てくると、里に棲んでいる、たくさんのからすに、たかっていじめられるように、子供には、町を通る人間が怖ろしかったのです。

だれも、自分に気を止めるものがないと知ると、子供は、そのそばにあった時計屋の店さきにゆきました。その店には、ガラス戸の内側に、宝石の入った指輪や、金時計や、銀の細工をしたえり飾りや、寒暖計や、いろいろなものが並べてありましたが、中にも、一つのおもしろ

い置き時計が目立っていました。

それは、ふくろうの置き時計で、秒を刻むごとに、ふくろうの眼球が白くなったり、黒くなったりしたのです。

そして、時計の針が白い盤の面を動いていました。そのときはまだ、昼前でありましたが、著しく日の長くなったのが子供にも感じられました。

南の方の空の色は、緑色にうるんで、暖かな黄金色の日の光は、町の中に降ってきました。それを見上げると、子供は、いつかこの町を通ったことがあったのを思い出しました。そのときは、雪が盛んに降っていました。北風がヒューヒューと鳴って、町の中は、晩方のように、うす暗かったのです。日が短くて、時計の針が、白い盤をわずかばかりしか刻まないうちに、もう日が暮れかかるのでありました。

人々は、みんな吹雪の音に脅かされて、身をすくめ町の中を歩いていました。じきに暗くなると、どこの家も早くから戸を閉めてしまって、町の中は死んだようになりました。その後は、まったく風と雪の天地で、それはたとえようのないほど、盛んな景色でありました。子供はそれを忘れることができなかったのです。子供は、こうした吹雪を見るのが大好きでした。そして、黄金色の日の光を見ると、不思議に気持ちが悪くなって、頭痛がしたのであります。

子供は、ふくろうの眼球が、白くなったり黒くなったりするのを、もう見飽きてしまいました。そして時計屋の店さきを離れますと、また、どっちへ歩いていっていいかわからずに、う

ろうろとしていたのであります。

いくら気の強い子供でも、いまは泣き出しそうな顔つきをせずにはいられませんでした。

どっちへいったら、自分の家へ帰られるだろうかと思ったのです。

このとき、あちらから、真っ黒の頭巾を目深にかぶって、やはり黒い着物をきた、おばあさんがつえをついて歩いてきました。そして、町の四つ角に、ぼんやりと立っている子供を見つけますと、

「おまえは、こんなところにいたのか。」といって、子供の着物のそでを引っ張りました。

「おばあさん、もう家へ帰りたい。」と、子供は泣きだしそうな声でいいました。

「ああ、帰ろうと思って、おまえをさがしていたのだ。」と、おばあさんは答えました。

子供は、黙って、はだしのままおばあさんに連れられて、田舎路の方をさして歩いてゆきました。

あちらの森では、からすがやかましくないていました。

「ほんとうに、やかましくからすがないている。あれは、きっと里のからすだ。私たちをみつけて、鳴いているのだ。山がらすならあんなになきはしない。」と、おばあさんはいいました。

「おばあさん、からすが怖いよ。」と、子供は泣きだしそうな声でいいました。

「ばかな子だ。そんな弱いことでどうする。からすがきたら、私がつえでなぐってやる。」と、おばあさんは答えました。

子供は、からすのないている森の方を振り向きながら、おばあさんに連れられてゆきました。村にさしかかると、まだ田にも圃にも、雪がところどころ残っていました。町よりは雪が多かったのです。そして、村の子供らが、雪の消えた乾いた往来で、こまをまわしたり、鬼ごっこをしたりして遊んでいました。

その子供らの声を聞きつけると、子供は、怖ろしがって足がすくんでしまった。

「おばあさん、みんながいじめるから怖いよ。」といって、子供は、前へ歩こうとはしませんでした。

おばあさんは、当惑そうに子供の手を引きながら、

「先がなんというても、おまえは黙っていればいい。もし、あの子供らが口でいうばかりでなく、おまえをなぐるようなことをしたら、私が、このつえでそいつをなぐってやる。」と、おばあさんはいいました。

子供は、おばあさんの蔭に隠れて、みんなの遊んでいるそばを、逃げるようにしてゆきすぎました。

「やあい、どこかの弱虫め、やあい。」と、後ろの方で子供らが悪口をいいました。

「弱虫のくせに、はだしでゆくやあい。」と、また子供らがいいました。

おばあさんの蔭に隠れて、子供は耳の根まで真っ赤にしながら、黙って、恥ずかしがっていました。

「おまえは、いい子だ。よく黙っていた。それでこそおまえは、ほんとうに強い子なんだ。」と、おばあさんは、強いけれど、また一面には臆病なところのある子供の頭をなでていいました。

二人は、さびしい、あまり人の通らない田舎路を、どこまでもまっすぐに歩いてゆきました。すると、あちらから、一人の百姓が、二頭の羊を引いて、こちらにきかかりました。これを見ると、子供は、また、怖ろしがりました。

「おばあさん、怖い。」と、子供は泣き声を出していいました。

「なにが怖いことがある。あれは羊だ。草を食べさせに百姓がつれてゆくのだ。よけてやれば、おとなしく前を通ってゆく。」と、おばあさんは答えました。

路の両側には、雪が消えかかって、青い草の出ているところもありました。けれど、だんだんと進むに従って、雪は多くなったのであります。

おばあさんと子供は、路の片端によって、百姓と羊を通してやりました。

二頭の羊は、仲よく並んで前を過ぎました。後から百姓がゆきました。

「これから先は、だんだん雪が深くなるばかりだ。」と、百姓は通り過ぎるときに、二人に向かって知らせました。

二人は、また、その路を北へ、北へと歩いてゆきました。やがて、路は、広い野原の雪の中につづいていました。広い、広い、野原はまったく白い雪におおわれています。子供はその雪

の中を、元気よくおばあさんの先に立って、はだしで進みました。

北の地平線は、灰色に眠っていました。まだ、そこには春はきていなかった。

「おばあさん、もう家が近くなった。」と、子供はいいました。

「ああ、もうここまでくればだいじょうぶだ。」と、おばあさんも答えました。

このとき、子供は、懐の中から角笛を取り出しました。そして、北の野原に向かって、プー、プ、プー、と吹き鳴らしたのです。すると、たちまち、無数のおおかみが、どこからか群れをなして、雪をけたって駆けてきました。子供は、その中の一頭に早くも飛び乗りました。そして、南の空を見返りながら、太陽に向かって威嚇しました。すると無数のおおかみは、等しく太陽に向かって、遠ぼえをしたのであります。その声は、じつにものすごかった。広野に眠っている遠近の木立は、みんな身震いをしました。

寒い風が急に北の方から起こってきて、雪がちらちらと降ってきました。見ると、さっきまで、つえをついて、黒い頭布をかぶっていたおばあさんは、じつは魔物であったのです。黒い頭布と見えたのは、大きな翼をたたんで、その頭を隠していたからです。

たちまち、魔物は、大きな翼を羽ばたいて、大空に舞い上がりました。子供が角笛を吹いて、北へ北へと、おおかみの群れとともに駆け去る頭の上の空には、黒雲がわいて、雷がとどろいていたのであります。

南の空からはしきりに、金色の箭が飛んできました。けれど、ここまで達せずに、みんな野

原の上に落ちてしまいました。すると、そこには、雪が消えて、下からかわいらしい緑色の草が芽をふきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　1」講談社
　1976（昭和51）年11月10日第1刷
　1977（昭和52）年C第3刷
初出：「童話」
　1921（大正10）年3月
※表題は底本では、「角笛《つのぶえ》吹《ふ》く子《こ》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：江村秀之
2013年9月8日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

角笛吹く子

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/